

フィールドワークの体験

文学部 亀田 裕見



1996年に文教大学文学部日本語日本文学科に赴任。授業では近世語から現代語までのあらゆる言語領域を扱うが、専門は日本語方言学、音声学である。特に音声分野では生の発音を収集しないことには研究は始まらない。そのために必要なフィールドワークは、大学3年次から全国規模の調査に参加する機会を得、指導教員以外にも第一線で活躍する他大学の研究者達と組ませていただいたことで大いに勉強させられた。その他、個人での調査経験はもちろん、院生時代に多くの共同研究をマネジメントさせてもらった経験が現在の授業経営に役だっている。(かめだ・ひろみ)

方言研究はフィールドワークの欠かせない分野である。授業ではゼミ（卒業研究）の学生には、後に卒論を書くために必ずこの経験を課している。また、フィールドワーク自体を授業目的とする授業を毎年1授業は開講するようにしている。フィールドワーク自体が目的ではないが、過程でフィールドワークを課すことになる授業もある。本稿では、受講生全員が同じ目的で取り組む「共同調査」を行った授業に限って、これまでに試みてきたことを紹介する。

1. 授業としての言語調査体験の側面と調査の種類

フィールドワークを必要とする学問分野は社会学・民俗学・人類学、列挙にきりが無い。これらと言語調査の間には、共通点と相違点がある。共通点はフィールドに出て、そこでなにがしか他者の協力を必要とする点である。言語を対象とした調査の独自点としては、インフォーマント（情報提供者という意味での調査協力者・話者、以下本文中はINFと略す）に普段あまり意識されていない言語を言語でもって尋ねるといふ、メタ言語的技術が必要とされ、話者にもそのような内省を強いる点である。学生への指導も技術的にはINFとの対応と調査目的の遂行という二点に留意して行ってきた。

前者では特に必須のことがある。それは社会性、協調性、思いやりというあまりに常識的な「心」である。仮に協力者に直接対面しないアンケートであっても、相手への心配りは欠かせない。しかし、心配りだけで、学問的な目的を達成できないようでは意味がない。そのバランスは、体験するしかないものであ

る。このようにフィールドワークを行うことは調査技術やコミュニケーション能力の総合的授業になる。

調査は目的・実施形態・質問方法・対象分野などから分類される。卒論では個人で行わせるが、授業では共同調査である。そのため、調査員となる学生の間で、目的はもちろん、どのような順を追って聞いていくのか、記録の取り方、項目の優先順位など、細かい点に及ぶ共通理解が必要である。資料に均一性が無いと、その後のデータ整理に困るからである。

調査の方法は、卒論などではアンケートを配って協力者の顔を見ず安易にすまそうと考えがちなので、授業では対面式で直接INFと向かい合うような形を経験させる。質問方法も、共通語翻訳式といわれる方法が準備としては楽だが、なぞなぞ式や説明式その他、多少時間のかかる方法を探らせる。対象分野は一長一短があるが、音声分野は、あらかじめ聴き取り訓練をする必要があり、集めたデータの均質性にも問題が出るため、初期の頃は取り入れていたが、一年間の授業で共同調査

として行うのは時間的に難しい。

2. 文教大学で学生と共に行ってきたフィールドワーク

これまでに行ってきた共同調査について、関わる授業・協力機関（個人名は除く）・目的・形式・結果や問題などを簡単に述べる。調査は（3）が4人程度のグループで、他は全て二人組で行った。

（1）蓮田調査（方言体系記述調査）

関連授業：卒業研究Ⅰ（3年）・Ⅱ（4年）
協力機関：蓮田市教育委員会・平野中学校・農業トレーニングセンター・上平野自治会

埼玉県蓮田市上平野・高虫地区における、音韻・アクセント・語彙・文法・待遇表現にわたる基礎的調査。方言研究で以前から注目されている地域。公共施設に来ていただく、または自宅に伺う面接式と、アンケート方式の二本立て。中学生・中年層・高年層の3世代を比較。98年度は前年度結果をもとに、A：人称代名詞の場面別使い分け、B：方言語彙の残存と使い分けに絞った。

1997年度 9月4～7日 参加学生10人・
INF数35人

1998年度 9月6～8日 参加学生13人・
INF数31人

調査内容・質問の仕方も全て学生に工夫させた。INFに来て頂く場合にはお茶だしなどの接待もした。

（2）伊豆南部調査（社会言語学的調査）

関連授業：卒業研究Ⅰ（3年）
協力機関：下田市と南伊豆町の教育委員会・観光協会・下田中学校・南伊豆中学校・南伊豆東中学校・下田市みやげ店組合

伊豆半島南端にある下田市・南伊豆町は、温泉・釣り・海水浴・海産物などを資源とする観光地。他地域から短期滞者が出入りする観光地における方言の残存・変容、共通語と使い分けを、観光地の形態、①鉄道・土産物店・観光名所・大規模宿泊施設のある下田市（大規模）、②海水浴客が集まる弓ヶ浜海岸（中規模）、③個人経営の民宿中心に釣り客・海水浴客などを集める集落（小規模）の3種

で比較。予備調査で自然談話収録・録画と意識調査。本調査は項目を絞り込み多人数調査。あらかじめINFを依頼してアポイントメントを取らない「飛び込み式」。中学生のみ、学校に依頼してのアンケート式調査。

予備調査

1999年度 7月9～11日 参加学生7人・
INF数7件

本調査

1999年度 11月3～5日 参加学生8人
2000年度 10月22～24日 参加学生7人・
本調査 INF合計366人

二人組で、地域を分担し、目標人数を定めて各戸をまわる飛び込み式はやはり勇気が必要であり、学生は知らない土地で相当疲れたようである。



伊豆南部調査風景 下田市の土産物店にて

（3）キャンパス言葉（社会言語学的調査）

関連授業：日本語学演習（2年）

学内におけるもので協力機関は特になし。集団語として学生に最も身近な本学越谷校舎のキャンパス言葉の研究。まず学科・専修ごとに偏らないよう、語と意味・用法・例文を収集。これを元にアンケート方式で、各語についていつ誰から聞き、いつ誰に対して使うようになったかを調べ、結果を辞書形式に。

1999年度 参加学生34人・INF数342人・
記述語数611語

2000年度 参加学生13人・追加記述語数
206語

2000年度は意味記述の充実と変化・消失したものを調べ補足。授業は半期のみ。この2年の間でさえ消失・変化があり、後年同じ事をして比較する可能性を残した。

(4) 埼玉県東部調査(言語地理学的調査)

関連授業:卒業研究Ⅰ(3年)・日本語学演習(2年)

協力機関:埼玉県東部の各市町村教育委員会、および公民館、自治会(多すぎるため省略)

地元埼玉県方言は、すでに秩父地方と中部地方の細かな言語地図があるが、東部はない。そこで埼玉東部の言語地図を、高年層と中年層で作比較。パソコンによる様々な技術が発達し、学生の操作技術も向上しており、これを利用した言語地図作成を試みる。INFは生え抜き高年層男性と中年層男性で、全てご自宅に訪問しての対面式調査。

2001年度 10～12月 参加学生14人・INF数41人・東武伊勢崎線沿線

2002年度 10～12月 参加学生8人・INF数31人・東武伊勢崎線より東部地域

2003年度 6月～8月 参加学生11人・INF数34人・東武伊勢崎線より西部地域

2004年度 6月～8月 参加学生14人・INF数27人・埼玉県中央部寄り地域

初年度は調査項目の選定もあったため大変であったが、2年目からは、調査依頼交渉と、調査の実施、結果のまとめに比重が置けるようになった。01・02年度は調査地点がまだ少なく、グロットグラムのレベルであったが、03年度からは地点数がまとまってやっと地図化に入った。これを一部学祭で展示発表した。この調査も今年度をもって仕上げとなり、現在次の企画を考えている。



埼玉東部調査風景 行田市のINF宅にて

3. 授業の過程

授業の進行について、4つにわけて内容と留意していることを述べる。

(1) 調査の流れの把握と基本的姿勢

授業の初期には、調査の始まりから終わりまでのステップを時系列に並べ、それぞれの段階で何をしたらいいのか、どんな反応やトラブルが予想されるか、どう対処するか等を考えさせる。学生には、我々は招かれざる客であること、調査するのでなく「教えていただく」という姿勢を忘れないことを強調する。できればINF自身が調査に協力しながら自分の言葉に気づき楽しんでもらうのが理想である。目的の達成とINFへの思いやりの折り合いについて考えさせる。近年はとくにINF自身も敏感になっている個人情報管理に気を配ることを忘れないよう留意させる。

(2) 調査実施までの手続き

INFを探するため公共機関(教育委員会や公民館)に手紙を書き、さらに電話での交渉をする。全く経験がないので手紙の表書きすらできない学生もいる。簡単なマニュアルを渡すが、その通りには決して進まない。互いに顔も分からない電話は、相手も相当に警戒し、学生は丁寧な対応をしようとするが言葉がうまく出ない。かける前に電話機を見つめて緊張している。またINFのお宅に伺うために交通機関を調べる。

(3) 調査の実施

実際の調査直前には、教員をINFに見立てた練習を行う。わざと難しいINFを装い、とっさにどんな反応を返すか考えさせる。しかしこれも現場では練習通りにはいかない。そもそもまず、INFのご自宅に行き、挨拶から辞去まで、どのような言葉を発し、振舞をすることも初体験である。調査自体の進行中は、二人組の一人を内容進行に、もう一人を録音やINFへの心配りに集中するように役割分担させる。終了後はすぐ調査学生自身の直筆コメントをそえた礼状を出す。調査実施中は、調査中にどのようなトラブルがあったか報告会をし、他班の経験を共有する。

(4) 調査後の整理

集めたデータを共有するため、結果をパソコンに入力する。この時も個人情報の管理に注意させなければならない。各自にテーマを見つけさせ、分析・結果のまとめに入る。大量のデータをどのように扱うか、グラフ・表・地図の作り方を学ばせる。

(5) 調査の結果の公表

個々の学生にレポートによって最終的に結果を提出させていたが、それでは不十分と考えていた。たとえ学生の勉強のための調査とはいえ、協力してくれた機関や INF の努力を考えると、対外的にも結果を公表していくべきである。とはいえ、学生の調査では不備も多く、論文にするのには無理のあるデータもある。大学によっては質の高い調査をして、結果を論文にしたり、冊子にしたりしているが、私の指導力の現状からは、学生自身がまとめ公表して充実感を得ることの出来る方法として学祭での発表が適当と考え、昨年初めて実施した。内容は一人一枚の言語地図を作成し解説を付したものの展示である。協力者・協力機関には案内状を出し、実際にその葉書をもって来てくださった INF もあった。協力者の一覧にご自分の名前を見つけて満足されると共に、できあがった地図をみて埼玉にまだこれだけの方言差があるということに驚かれた。その姿を見ることがまた学生にも充実感を与えた。今年度も行う予定である。



2003 年度学祭展示発表

4. 学生の反応とフィールドワークの面白さ

データを見て仮説をたて、仮説をたててデータで検証する。同じ対象も光の当て方で影が変わるように、調査の方法如何で見えなかったものが見えてきたりする。フィールドワークとは、まさに現場で、この仮説と検証の狭間で興奮させられるものである。研究者にもよるであろうが、私はこの興奮と、見知らぬ土地と見知らぬ相手との対峙から、相当疲弊する。これは楽しいことでもあり、自分との戦いでもある。しかし、学生にとってはどんな体験として残るだろうか。

彼らが最も大変と感じているのは、依頼交渉である。ここで苦労したが、いざ調査に伺うととても親切にされたと感激したりする。学生にはこのような苦楽の激しい体験としての思い出になってしまうのかもしれない。できれば、調査をして学問的疑問が解決したという充実感も感じさせたい。それには結果が出やすく、学生にそれが実感できる調査を企画する事が教員側の大事なポイントである。この点、毎回反省することが多い。

プロデュースする教員は、各学生の行動を把握し補い、時には謝罪に回ることもあり、気苦労は耐えない。学問的にはともかく、学生側にはこの体験から学ぶことはいくらでもあり、卒業後の生活で活かせるものも多いはずである。学生がそれを自覚せずとも、何らかの蓄積になっていることを願っている。

なお、フィールドワークを課す授業は「実習授業」として位置づけたいものであるが、現在はこのような枠に置かれていない。調査中の学生の安全や経費（機材・消耗品・通信費・謝礼・旅費）の問題があり、どのように解決するか毎回悩むが、本稿では触れなかった。